

第6章 ベトナムの理工系学生の進路意識・大学生活・職業観

第1節 はじめに

本章では、ベトナムにおける理工系学生を対象とした聞き取り調査結果をもとに、彼らの進路・就職意識、大学生活、そして将来展望についておもに検討する。本学生調査は、ハノイ工業大学（Hanoi University of Industry）のベトナム日本センター（Vietnam Japan Center、以下 VJC とする）の中級職業訓練課程（Vocational Secondary Course：2年制。以下、職業訓練課程とする）、VJC の職業訓練短期大学課程（Vocational College Course：3年制。以下、短大課程とする）、大学課程（University Course：4年制）に在籍している学生 11 名、およびハノイ工科大学（Hanoi University of Science and Technology）の大学生 5 名（HEDSPI 留学生 4 名¹+卒業生 1 名）を対象に実施されたものである²。ハノイ工業大学の学生 11 名、およびハノイ工科大学卒業生 1 名への聞き取りは 2012 年 12 月 12 日～13 日にベトナムにて実施され、ハノイ工科大学の HEDSPI プログラム参加者 4 名への聞き取りは 2013 年 5 月 22 日に立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて実施された。対象者の内訳は図表 6-1 に掲載している。それぞれの大学の概要等については、本書 3 章（ハノイ工業大学）および 4 章（ハノイ工科大学）で詳述したため、そちらを参照されたい。調査協力者は、全員が理工系分野（ほとんどが工学関連）を専攻している。性別は、ハノイ工科大学の農学系学科を卒業した女性 1 名以外は、すべて男性（15 名）である。生年は、ほとんどが 1990 年～1993 年の間であり、例外として 2 名が 1980 年代生まれとなっている。

図表 6-1 大学別・課程別調査協力者数

大学名	課程	人数	備考
ハノイ工業大学	中級職業訓練課程	3	専攻：機械加工のみ
	職業訓練短期大学課程	4	専攻：機械加工、溶接、工業電子
	大学課程	4	専攻：機械工学のみ
ハノイ工科大学	大学	5	うち HEDSPI 留学生 4 名、農学系 1 名（卒業生）
合計(人)		16	

第2節 理工系学生の出身背景と進路選択

本節では、調査協力者の高等教育入学以前の状況について、1. 出身地域、2. 出身家庭、3. 出身高校およびそこでの進路指導、4. 大学・専攻分野の選択理由に着目し、検討する。

¹ 4 名とも、ハノイ工科大学の HEDSPI（Higher Education Development Support Project on ICT）プログラム参加者であり、3 年次から奨学生として立命館大学の情報理工学部留学（転入学）している。他の留学先としては、慶應義塾大学と会津大学がある。HEDSPI プログラムに関しては、第 4 章を参照のこと。

² ベトナム教育訓練省(MOET)の統計によると、2012～2013 年度における中級専門学校(Truong Trung cap Chuyen nghiep：職業訓練系の専門学校)の学生数は 61 万人、短大(Cao dang)学生数は 80.1 万人、大学(Dai hoc)学生数は 148.1 万人と推計されている（日本貿易振興機構 2012, p.2）。

1. 出身地域

まず、調査協力者の【出身地域】について見ておこう（図表6-2）。協力者全員が、ベトナムの北部（紅河デルタ[ハノイ市、フンイエン省、タイビン省、ニンビン省]、北部丘陵山岳地域[タイグエン省、バクザン省、フート省]）あるいは北中部（北中部・中部沿岸地域[タインホア省、ゲアン省]）出身であり、中部高原や南東地域からハノイに進学してきた者はいない。南北に細長く、両極それぞれにハノイとホーチミンという大都市を持つベトナムにおいては、進学にともなう南北間での地域移動は生じにくいのかもしれない。協力者のうち、ハノイから最も離れた地域から来ているのが、ベトナム北中部にあるゲアン省出身のFさん（ハノイ工業大学・短大）であり、現在彼はハノイで寮生活を送っている。

図表6-2 出身地域別進学先（大学・課程）

出身地域	進学先（大学・課程）				合計（人）
	工業・職訓	工業・短大	工業・大学	工科・大学	
紅河デルタ	3	1	2	4	10
ハノイ市	2	1	1	2	6
フンイエン省	-	-	1	-	1
タイビン省	1	-	-	1	2
ニンビン省	-	-	-	1	1
北部丘陵山岳地域	-	2	1	-	3
タイグエン省	-	-	1	-	1
バクザン省	-	1	-	-	1
フート省	-	1	-	-	1
北中部・中部沿岸地域	-	1	1	1	3
タインホア省	-	-	1	1	2
ゲアン省	-	1	-	-	1
合計（人）	3	4	4	5	16

注：ハノイ市、タインホア省、ゲアン省は、2008年時点で人口トップ5の省・中央直轄市。地域名は、中西（2010）の各省・市データ（p.7）を参照した。

進学先別に見ると、ハノイ工業大学の短大課程や大学課程では比較的幅広い地域からの学生が含まれているが、職業訓練課程進学者はみな、紅河デルタ地域（うち2名がハノイ市内）の出身となっている。他方、ハノイ工科大学の場合、タインホア省出身のNさん1名を除いて、全員が紅河デルタ地域出身である。しかし、Nさんは、地元の中学校を卒業後、ハノイ市内にあるハノイ国家大学の付属高校に入学するために、父親とともにハノイ市内に移り住んでいる。そのため、高校卒業時点の居住地で見れば、ハノイ工科大学進学者は比較的ハノイ中心部から近距離の地域から移動してきたことになる³。また、このNさんの例に見られ

³ 労働政策研究・研修機構（2012）におけるハノイ工科大学・工学部（電子・テレコミュニケーション）卒業者の事例によると、大学の同級生のうち、「ハノイ出身が20%、残りの80%は地方出身」（p.100）となっている。本稿でも、特にハノイ市出身者が多いというわけではないが、大学（短大含め）に関しては、大学ランクが高くなるほど、教育レベルの高い高校が比較的多い都市部からの進学者が増え、出身地域の幅は狭まるのかもしれない。

るように、教育環境の整備された都市部の有名校を目指して、比較的早い時期から就学目的で都市部に移動してくる層も現在では少なからずいるようである。Nさんによると、彼が卒業した地元の中学同級生（約100名）のうち、ハノイ市内の高校に合格・進学した者は5名（うち2名がハノイ国家大学付属の師範専科高校へ）おり、全員が男性であったという。ただし、ニンビン省出身のOさん（ハノイ工科大学）のように、地方からのハノイ市内の高校への進学は下宿代など経済的に負担となるため、実家から通学可能な地元の高校を選ぶケースは依然として多いと思われる。

2. 出身家庭

つぎに、調査協力者の【出身家庭】について検討しよう。彼らの家族（両親、きょうだい）の学歴および職業について示したのが、図表6-3である。全体的に見て、両親のうちどちらかが農林業従事者である者の割合は高いと言える⁴。ただし、理工系トップランクに位置するハノイ工科大学と、中堅レベルのハノイ工業大学の学生を比べると、両親の職種にはいくらか相違が見られ、ハノイ工科大学の学生の場合、農業従事者や工場勤務のワーカーを親に持つ者は比較的少なくなっている。つまり、学生の教育達成（学歴・学校歴）に対して、親の職種等の出身背景の影響があることが、少なからず見て取れるのである。

他方、両親やきょうだいの学歴を見ると、大学進学者ほど、周囲に大卒以上の学歴を持つ者、あるいは大学進学希望者（例えば、弟たちのために大学進学を断念したIさんの姉など）が多くいるように見受けられる。また、大学進学者間で比較すると、ハノイ工科大学進学者のきょうだいの多くが大学在学中であるか大卒以上の学歴を有しているのに対して、ハノイ工業大学進学者のきょうだいの場合、大学進学を断念し、工場で働く者（主に女性）が多い傾向がある⁵。ただし、後述するように、大学進学希望や進学先・専攻分野の選択に対して、こうした家族の影響が強い傾向にあるかということ、必ずしもそうではない。

れない。

⁴ 急速な工業化が進展しているとはいえ、「ベトナムの第1次産業は、国内総生産（GDP）の約20%、就業人口の約50%、輸出総額の3割弱を占め、ベトナム経済へのインパクトは依然として大きい」（中西編 2010, p.48）。

⁵ ここで注目されるのが、男女間での進路形成の違いである。例えば、以下のFさん（ハノイ工業大学・短大課程）の語りは、その点について考える上で興味深い。彼によると、彼の出身高校（地元の2番手校）の同級生を見た場合、女性の方が、大学受験をする者（医学や経理など）が多い反面、受験に失敗する確率が高いという。そして、受験に失敗した女生徒たちは、もし短期大学や中級専門学校等に進学しても、経済的な負担が大きく、卒業後就職口が見つからないという理由で、より上の学校への進学は諦め、高卒後すぐに工場などでワーカーとして働き始めるという。学校の先生もそうした進路を女生徒にはあまり勧めないようである。他方、男性の場合は、たとえ短期大学や中級学校に進学したとしても、卒業後に「プロフェッショナルな」職に就ける確率が（女性に比べて）高いため、最初から大学受験を考えず、そうしたタイプの学校を選ぶ傾向にあるとのことである。

図表6-3 調査協力者の家族の学歴・職業

進学先	No.	父	母	きょうだい
工業・職訓	A	工務店+養豚	小学校教員	妹（短大卒／中学校教員）
	B		マンション清掃等	兄（中級専門学校（薬学系）卒）
	C	小卒以下／農業+工員	中卒／農業	兄（工業大学中退）
工業・短大	D	家具製作（工場）	農業+野菜販売	兄（就職）、姉（既婚）、弟2（高校生）（中学生）
	E	農業	農業	弟（中学生）
	F	高卒／徴兵→農業	高卒（師範中級専門学校受験失敗）／農業	弟（高校生）
	G	中卒／農業	高卒／農業	姉（高卒／日系企業ワーカー）
工業・大学	H	職人（土木関係）	販売（米）	姉2（大卒／高校教員）（高卒（大学受験失敗）／繊維工場勤務）
	I	農林業	農林業	兄（中級専門学校卒／役場勤務）、姉2（大卒）（高卒（弟のため進学断念）／工業団地勤務）、弟（工科大在学中）
	J	高卒／徴兵→農業+小売業	高卒（医科大受験失敗）／徴兵→農業+小売業	
	K	農業大卒／農業	高卒／農業	姉2（高卒（師範大学受験失敗）／縫製小工場経営）（高卒（師範大学受験失敗）／ワーカー）
工科・大学	L	大学教員（理科系）	国機関・研究員	
	M	商業大卒／国営企業子会社社長→定年	短大卒／夫の会社に勤務	姉2（工科大（IT系）卒／北欧系IT企業勤務）（大学（観光系）在学中）
	N	軍隊→農業→警備員	師範短大卒／小学校教員	姉（農業大・大学院（修士課程）在学中）
	O	軍隊→小売業	中級専門学校（医療系）卒／診療所開業	妹（高校生）
	P	職業訓練高等専門学校（機械系）卒／同校教員	外国語師範大卒／高校教員	妹（大学（情報通信系）在学中）

3. 出身高校およびそこでの進路指導

つづいて進学先別に【出身高校】の違いについて、検討していこう。出身高校別進学先については、図表6-4の通りである。まず指摘できるのは、進学先の大学・課程によって、調査協力者の出身高校ランクが異なっているということである。つまり、高校間にトラッキング構造⁶が形成されている様子がうかがえる。大学進学者の場合ほど、地元でトップ層の高校出身者や、同級生の多くが大学進学希望であるような成績上位校出身者がほとんどとなり、また専科高校など、高校時点から専門性の高い内容の授業を受けている生徒も、大学進学者、特にハノイ工科大学進学者ほど多く見られるのである。もちろんこのトラッキングの存在が、生徒の進路選択をどの程度制約するものであるのかについては今後検討の余地が大いにある

⁶ ここでは、トラッキングを「どのコース（学校）に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定されること」（藤田 1980）という意味で用いる。

が、ベトナムにおいても高校段階でどういった学校・コースに進んだかがその後の彼らの進路や意識に及ぼす影響は少なくないと推測される。ただし、図表6-4の分類は便宜的になされたものであり、同じレベルに分類される高校であっても、出身地域の違いを反映して、教育内容・レベルや卒業生の進学先、大学進学率には大きな差がある。例えば、Kさん（ハノイ工業大学・大学課程）は、出身県に選択可能な高校が2校しかなく、そのうち比較的学習環境の良い高校に進学しているが、彼の高校の同級生43名のうち、大学進学者は19名、短大進学者は13名であり、その他は高校卒業後、地元の工業団地にワーカーとして就職したという。他方、Mさん（ハノイ工科大学）の高校は、ハノイ市内にある中高一貫の専科高校であり、成績トップ層は英米仏など国外の大学に進学・留学し、国内の医科大学や工科大学を受験する層がそれに続くという。ちなみに、Mさんは、高校時代に数学を専攻しており、高校の授業で習ったプログラミング言語（Pascal（パスカル））が好きであったことから、大学ではIT系の勉強をしようと考えたという。

図表6-4 出身高校別進学先（大学・課程）

出身高校・クラス	進学先（大学・課程）				合計（人）
	工業・職訓	工業・短大	工業・大学	工科・大学	
上位校 （専科高校・クラス）	0	2	3（1）	5（4）	10
中位校	2	1	1	0	4
下位校	1	1	0	0	2
合計（人）	3	4	1	0	16

注：出身高校ランクは、調査データから把握しきれた範囲での、高校の県内での位置（X校中○番目）、あるいは大学進学者率から、筆者が独自に判断・分類した。

このように進学先によって出身高校ランクが異なる傾向が見られたが、彼らが在籍していた高校においては、いかなる【進路指導】がなされていたのだろうか。今回の調査結果から見えてきたのは、調査対象者のほとんどは、高校在学時に先生から具体的な進路指導をそれほど受けておらず、もしあったとしても、それをあまり重要視していないということであった。また、高校別に進路指導の熱心度に大きな違いがあるのかどうか、そのはっきりとした違いは見出せなかった。具体的な指導内容としては、Jさん（ハノイ工業大学・大学課程）のように、進学先を選ぶ際に、先生がインターネットで調べてくれた情報を参考にしたという例や、Kさん（ハノイ工業大学・大学課程）のように、地元にある工業団地で就職しやすいという理由で、多くの先生が機械工学を勧めてくれたという例などが見られる。しかし、多くの場合、先生から何か助言があったとしても、Aさん（ハノイ工業大学・職業訓練課程）のように、全体に対して、もし大学に入れなかったら、職業訓練校にでも行きなさいと言われていたり、Lさん（ハノイ工科大学・卒業生）のように、大学、少なくとも短大には進学したほうが良いと言われていたりする程度であったようである。また、このように高校の先生から進

学指導があまりなされない理由として、Iさん（ハノイ工業大学・大学課程）は、高校の先生はハノイの大学のシステムを把握していないため、具体的な大学のことについては指導できないのだろうと考えている。そのかわり、進学先の選定に関しては、両親からの希望や、大学ですでに学んでいる親戚の兄弟からの意見、友人からの助言、インターネットや大学案内の書籍から得た情報などが参考とされている。

4. 大学・専攻分野の選択理由

では、彼らが進学した大学あるいは専攻分野は、どのような理由で選択されたのだろうか。以下、【大学・専攻分野の選択】について、進学課程別に順次検討する。まず、大学進学に関しては、労働政策研究・研修機構（2012）の調査結果同様、基本的には、大学入試の得点や大学の知名度によって、受験・進学する大学が選ばれていると考えられる⁷。専攻分野に関しては、中学・高校で得意だった科目（数学、物理、生物）の内容が活かせる、あるいは興味を持った分野の勉強ができるかどうかを基準に、おもに選択されているようである。しかし、それだけではなく、小さい頃から農業・農耕機械に接していたことで、機械工学に憧れを抱いており、また将来の就職可能性を考慮して経済分野ではなく、機械工学を選択したというKさん（ハノイ工業大学・大学課程）や、学校の授業の影響に加え、ゲームが好きであったことから、IT系の勉強をしたいと思ったMさん（ハノイ工科大学）、国内で流行っているITの知識を獲得したいと思ったというOさん（ハノイ工科大学）のように、学校外での経験や国内の状況が影響している場合もある。

大学別に見ると、ハノイ工業大学の大学課程の場合、大学入学試験の点数が足りなかったため、第一志望の大学に不合格となったか、ハノイ工科大学に進みたいと思っていたが、自信がなかったり、不合格であった場合のリスクが高いと考えて、受験校を下方修正したという者が4名中3名いる。それに対して、ハノイ工科大学（HEDSPI 留学生）の場合は、同大学の数学専攻に不合格であったためIT系に進んだNさんを除いて、他の大学（医科大学、貿易大学など）にも合格していたが、あまり興味のある分野ではなかったため、自らの関心に近いIT系分野の方を選んだという者が見られた（両親の勧めで医科大学を受験し合格していたOさんとPさん）。

短大課程進学に関しては、大学受験に失敗したため、（同じ大学の）短大に進学したという者が3名おり、短大進学者には大学進学希望であったがそれが叶わなかった者が多く含まれていると推察される。Eさん（ハノイ工業大学・短大課程）によると、短大卒業後は大学への編入学を希望する同級生は全体の半数近くいるという。また、大学の場合と同じく、短

⁷ 労働政策研究・研修機構（2012、p.86）における知見は、以下の通りである。現在所属する大学、学部・専攻は、入学試験の成績を考慮して、選ばれている。両親の意見を参考にして選んだと言う場合も、両親が入学試験の成績から、入学可能な大学を選んでいる。また、専攻より、大学の知名度のほうが、重視される。ただし、大学選択は入学試験の成績によって決まる傾向が強いが、学部・専攻に関しては、個々人の適性を考慮して選択されていると考えられる。

大でも、専攻分野の選択に際して、本当は情報学を学びたかったが、機械工学のほうが就職機会が多いだろうという両親や友人の助言から、専攻分野を選んだ G さん（ハノイ工業大学・短大課程）や、この学校を卒業し、現在地元の日系工業団地で働いている村の先輩と同じルートを歩みたかったという F さん（ハノイ工業大学・短大課程）のように、将来の就職可能性が顧慮される場合が見られた。

職業訓練課程の場合は、機械への興味や関心に加えて、A さんや B さんのように、入学前の就業経験から、しっかりと技術を身につけたいという理由で進学した者も含まれている。また、学校選択に関しては、きょうだいや親戚、友人の紹介や影響によって、ハノイ工業大学の VJC の存在を知り、その就職率や教育の質の良さにひかれて、同校を選んだようである。

ちなみに、ここで彼らの高卒後から進学までの状態について、触れておこう。【高卒後の状態】としては、今回の調査協力者の場合、高卒後すぐに進学した者がほとんどであったが、職業訓練課程の 2 名（A さん、B さん）は、将来の進路を具体的に思い描いていなかったことから、高卒後すぐに進学はせず、家業の手伝いや、親戚や友人の紹介によって工場等での就労を経験している。そして、その後、進学を決めている。また、ハノイ工科大学の 1 名（L さん、女性）は、大学受験時に農業大学に合格していたが、地理的な利便性の低さや人気の低さを理由にそこには入学せず、そのかわりに技術系・生産関係の大学の中ではステイタスの高いハノイ工科大学の短期大学課程⁸に進学し、卒業後、編入学で同学校の大学課程に進んでいる。

第 3 節 理工系学生の大学生活と職業観

本節では、理工系学生の大学生活と職業観について、1. 大学生活、2. インターンシップ、3. 仕事に対する考え、就職に向けた取組み、4. 将来展望に着目し、検討する。

以下は、基本的に調査協力者の大学別・課程別に、ハノイ工業大学 VJC の中級職業訓練課程、VJC の職業訓練短期大学課程、大学課程、ハノイ工科大学の順に記述する。いずれも学生の語りによる描写であり、第 3 章（ハノイ工業大学）及び第 4 章（ハノイ工科大学）を併せて参照されたい。

1. 大学生活

ベトナムにおける大学生の 1 日はどのようなものだろうか。ここでは【大学生活】として、住まい、日常生活の様子、学費・生活費等の状況について整理する。なお、ハノイ工科大学の HEDSPI 留学生については、ベトナムでの暮らしについて述べてもらっている。

⁸ ハノイ工科大学の短期大学課程について詳細は把握していないが、最初の 3 年は「同じ工科大学」の「短大に 3 年行っていた」という L さんの語りから、このように表記している。

(1) 住まい

まず、住まいをみると、大学近郊に実家がある3名（Bさん、Cさん、Gさん）は自宅であるが、それ以外は下宿（1～2人ひと部屋）住まいが多く、他に寮（2名）、親戚宅（2名）などとなっている。Nさん（ハノイ工科大学）は、高校進学にあたって出身地から父とハノイ市内に引っ越してきて、借家住まいであった。学校へは徒歩、自転車、バス、バイク等で通学する。

(2) 日常生活の様子

では、日常生活の様子はどうか。ハノイ工業大学職業訓練課程についてみると、1年次のAさんBさんは、6時半～11時半と12時半～17時半が授業であり、その内容は工場実習が中心である。2名とも、休日たまにアルバイトをしており、Aさんはチラシ配り、Bさんは実家の近所の工場から頼まれる仕事に従事している。2年次のCさんは、6時半～11時半が授業であり、同じく工場実習中心である。午後からは親戚の機械関係の店の手伝いを行い、若干の小遣いを得ている。

短大課程については、2年次のDさんFさんGさんは6時半～11時半、加えて週に数日は12時半～17時半も授業が行われる。授業がない時間帯や休日は、DさんとFさんは日本語の勉強（Dさんは独学、FさんはVJCの日本語コース）をしている。Gさんは家業手伝い、共産青年団の活動（夏は週に1回）の他、夜は友人宅に遊びに行くこともあるという。3年次のEさんは、前期・後期それぞれ午前のみか午後のみ授業であるという。1年次後期及び2年次後期には、17時半～22時までの工場実習あるいは実験等が組み込まれていた。自由な時間は復習と友人との遊びに充てており、従兄の勤務先工場でソフトウェアの使い方を勉強することもある。アルバイトは1・2年次には行っていたが3年になり忙しくなってやめた。

大学課程の調査協力者（HさんIさんJさんKさん）は全員4年次であり、毎日7時～11時半（週2回工場実習の時は6時半～）、週に数日は12時半～17時半も授業である。座学が6割を占める。自由な時間は、勉強、アルバイト、遊び（HさんIさん）の他、企業が主催する商品や技術紹介フェアに参加するという者もいた（Jさん）。勉強については、図書館やラボで（Jさん）、インターネット等で独学（Kさん）、友人と（IさんKさん）、セミナー参加（Hさん）、クラブ活動として（Jさん）とさまざまな場や方法で行われている。勉強の内容としては、全員が英語を、2名がプレゼンテーション、時間管理等といったソフトスキルを（HさんJさん）挙げた他、Jさんは卒業研究を行っている。なお、現在クラブ活動に参加して日本語・英語・ソフトウェアの勉強をしているJさんによれば、ハノイ工業大学においては大学課程在学者を中心に週数日18時半～21時までクラブ活動が行われており、1年次～3年次の学生が積極的に参加する。Kさんから以前は英会話のクラブ活動に参加していたという話題があり、クラブ活動も大学における勉強の場として機能していることがうかがわれた。アルバイトについては、全員が経験しており、忙しくなってやめたHさん以外は、現

在も家庭教師（HさんIさんJさん）、カフェ店員（Kさん）等に従事している。

ハノイ工科大学・HEDSPI 留学生（MさんNさんOさんPさん）にベトナムでの暮らしを振り返ってもらったところ、6時45分～12時頃と13時～17時頃が授業であり、4名のうち3名はクラブ活動に、2名（MさんNさん）は学生協会（ボランティアのイベント等）にも参加している。クラブ活動の内容については、MさんNさん（Pさんは1ヵ月のみ参加）は日本語の勉強や日本文化についてのイベント開催を行うHEDSPIの日本語クラブ、Pさんは他大学学生も参加する音楽クラブを挙げた。クラブ活動等への参加はリーダーシップを含むソフトスキル習得も目指したものであるという。他方、Oさんは独学のほうが効率的と考え、クラブ活動には参加せず、授業が終わると帰宅して家事手伝い、自習をしていた。ハノイ工業大学の学生とは対照的に、アルバイトをしていた者はいない。

（3）学費・生活費

学費・生活費についてみると、ハノイ工業大学の職業訓練課程と短大課程在学者については、全員親や家族からの仕送りである。大学課程の者もベースは親・きょうだいからの仕送りであるが、奨学金を得ている者（HさんIさん）もいた。なお、Jさんは生活費についてはアルバイトにより賄っている。ハノイ工科大学・HEDSPI 留学生についてはベトナムでの学費・生活費の状況を確認できたのはOさんのみであり、同様に親からの仕送りであった。

2. インターンシップ

次に、【インターンシップ】の状況についてみよう。

ハノイ工業大学では、第3章で示されたように総合的な就職支援システムのなかで、インターンシップが重要な位置を占めており、必修のプログラムとなっている。

職業訓練課程においては、卒業研修として2年次の後期にインターンシッププログラムに参加することとなっており、VJCがインターンシップ先を開拓して学生に示し、学生が企業HPなどをみて希望の行き先を選ぶという。希望先については、1年次のBさんは明確に述べていない。Aさんは同じく1年次であるが、高卒後に働いていた近所の工場の先輩にCNC（コンピュータ数値制御）の魅力を教わり、CNCに関わる仕事がしたいとの意思を持っており、インターンシップについてもCNCが多いと聞いているトーホーベトナムを希望している。2年次のCさんは、今のところ人気のあるトーホーベトナムしか知らないが、タンロン工業団地内がよいという。

短大課程では、3年次の後期に2ヵ月間のインターンシップが行われる。3年次のEさんによれば受入先は自分で探し、見つからなければ大学が紹介してくれる。週に1度先生に報告、終了後報告書を提出し、8単位となる。Eさん自身は友人から兄の勤務先の電車関係の部品を作る工場を紹介され、友人とともにその工場にインターンシップを行う予定である。2年次ではまだ企業見学や工場見学に行ったことがないといい、インターンシップについても

来年初め頃に参加予定ということだけ認識している（Dさん）。

大学課程では、4年次後期（1月～3月）に誰でも参加できる工場見学やインターンシップがある。Iさんは、インターンシップ先に就職することも考えながら、共同研究をした先生にインターンシップ先の紹介を依頼している。Kさんは、自宅近くのトヨタに就職したいと思っており、インターンシップもトヨタを希望している。Hさんは、卒業研究（先生との共同研究）が学内の工場でできるため、学外でのインターンシップ参加は予定していない。

ハノイ工科大学でのベトナムにおける状況が確認できたのは、卒業生であるLさんのみである⁹。Lさんはハノイ工科大学の短大に入学後、大学課程に編入学しており、短大で1回、大学3年次に1回（クラス全員で5週間）、4年次に1回（クラスを2つに分け4～5週間）、さらに5年次の卒業研修として卒業研究のテーマにあわせて8週間にわたりインターンシップに参加した。インターンシップ先は、それぞれ先生が紹介してくれた。

なお、HEDSPI留学生のPさんは、日本でのインターンシップ参加はプログラミングやコミュニケーションスキル、ビジネス日本語等の上達につながり、ベトナムでの就職に効果的との考えから、研究室の日本人の先輩からもらった情報をもとに、独自に夏休みに2ヵ月間のインターンシップに申し込み中である（プログラミング言語を使う企業）。

3. 仕事に対する考え、就職に向けた取組み

ここでは、【就職や仕事選択に関する考え方】、【企業に関する情報源】、【就職に向けた取組み・就職経路】等についてまとめておく。

(1) ハノイ工業大学・職業訓練課程の学生の場合

調査協力者はどのような理由から、どのような企業や仕事を選ぼうとしているのだろうか。ハノイ工業大学の職業訓練課程の学生については、工場の清潔・衛生等の職場環境（AさんBさんCさん）、教育訓練の充実（Bさん）等を理由に、Aさんによれば日系企業を希望する学生がほとんどであるという。調査協力者のなかではAさんとBさんが日系企業を希望しており、Cさんについては日系企業には限定していないが、ベトナム企業よりも外資系企業がよいとする。VJCは日系企業に就職しやすい（Aさん）、VJCを紹介してくれた従兄弟が日系企業に就職して勤勉になった（Bさん）等の指摘もみられた。Bさんによれば、まず経験のために働いて技術を身に付け、賃金はそのあと考えるという者が多い。Bさんは、VJCでの教育を通じて仕事を通じた技能形成の重要性を強く意識するようになり、企業情報としても賃金よりもどのような技術を使っているか、その技術がまだ知らない技術か、受けられる教育訓練内容を重視する。Cさんは、「いい会社」として各種保険や手当の充実にも言及しつつ、長く働ける安定した会社を希望する。仕事内容については、AさんとBさんは機械加工

⁹ 第4章に示すように、HEDSPIでは4週間のインターンシップが必修となっている。

の専攻を活かして CNC (A さん)、機械関係 (B さん) の仕事をしたいと考えているが、C さんはいい会社に入りたいというだけで、仕事内容には言及していない。

企業に関する情報源をみると、VJC による企業見学 (B さん)、先輩 (A さん B さん)、選ばれた学生を対象とする企業との交流会¹⁰ (A さん)、就職関係の交流サイト (A さん) が挙げられた。2 年次の C さんは、就職先は先生に頼んで探すとの認識を持っており、インターンシップ先で経験を積んでいる者もいるが、まだ就職に関する情報を持っている者は多くないという。B さんからも VJC が用意している企業はととてもいいところが多く学生はそれ以外探さなくてもよいと思っているとの発言があり、職業訓練課程においては就職に関して VJC (の先生方) の就職支援・斡旋に対する信頼感が高いことがうかがわれた。

(2) ハノイ工業大学・短大課程の学生の場合

短大課程の学生については、D さんと E さんは、親を楽にさせたい (実家に送金も)、家族の負担にならないよう自立しなければとの考えから、D さんは収入が安定している会社を希望し、E さんはどこでもよいのですぐに仕事に就けるところ、その可能性が高いのはベトナム系私営企業であるという。F さんは日本にある企業もしくはベトナムの日系企業、まずハノイで就職活動をしてみるが地元がいい企業があればそちらでもよいとする。G さんは短大卒業後すぐに LETCO (ハノイ工業大学傘下の人材派遣・訓練協力会社、第 3 章参照) をつうじて労働力輸出の枠組みで日本行きを希望する。D さん、E さん、F さんについては、それぞれ溶接関係や金属加工の仕事 (D さん)、金型や CNC を扱う仕事 (E さん)、専門的な仕事 (F さん) と現在の専攻にかかわる仕事に従事できることも重要となる。とりわけ現在 3 年次 (最終年次) の E さんは、機械設計に携わる技術者になりたいが、いろいろな経験を積んでいく必要があるため、まずは作業員、ワーカーからはじめたいという具体的なビジョンを持っている。E さんによれば、技術者になりたいが能力不足のためまずは作業員からという考えを持つ友達は何にもいるという。他方、G さんについては、日本に行くための手だてに関心が集中しており、仕事内容についての発言は聞かれなかった。

企業に関する情報源については、3 年次の E さんは、家族からのプレッシャーもあって 2 年次から就職希望や企業の要求に応じる勉強について考え始めており、現在 24h.com という求人サイトや企業ホームページで求人情報を調べたり、親友と情報交換したりしている。大学では理論・実習両面で技術指導を担当する先生から企業が求める能力等についての情報を得ており、2 月に開催される就職フェアに期待している。2 年次の D さんと F さんの現在の情報源は主に大学である。D さんはどういう会社なら就職できるか等、就職に関して少し心配しているが、先生は具体的な就職先のことよりは、先輩や中級職業訓練課程の卒業生¹¹の

¹⁰ 会社概要と採用計画の説明との補足があり、第 3 章の図表 3-18 における企業別就職説明会を指すのではないかと考えられる。

¹¹ VJC の短大課程は調査時点で卒業生がまだない。

例を出しながら勉強を頑張る技術を身につければ就職できると話してくれるという。Fさんは、学校主催の就職フェアで情報を入手しており、これから先生と一緒に企業見学に行き、先生のアドバイスをもとに就職先を決めていくと認識している。日本行きを希望するGさんは、日本企業の（一般的な）情報は叔父に紹介してもらう予定だが、実際には日系企業の求人情報を収集している LETCO が行う試験を経て LETCO を通じて行くものと考えている。

(3) ハノイ工業大学・大学課程の学生の場合

大学課程の4名の就職先の第一希望は日系や韓国系等、いずれも外資系企業である。デンソーを希望するHさんは日本語や技術についての教育訓練が受けられること、キャノンやサムスンについて調べているIさんは待遇がよく勉強していることが活かせることを理由にあげ、国営企業では自分自身の技術力を高められないと考え、住宅・食事（昼食）・工場の清潔さといった環境を重視して就職先を選ぶというKさんは、工場のきれいさに加え、賃金を含めた労働環境がよいとされることから、サムスンを希望している。Jさんは奨学金が獲得できればまず日本に留学したいと考えており、就職はその後になるため、機械製造、建築関係企業等としながらも、具体的な企業名は挙げなかった。仕事内容については、設計技術者もしくは現場技術者（Hさん）、設計・機械組み立て・工作関係の現場技術者（Iさん）、機械設計や機械修理のエンジニア（Kさん）、機械工学の仕事（Jさん）といずれも機械工学の専攻を活かした仕事を希望している。

就職に向けた取組みとしては、大企業の場合は企業ホームページ、自社ホームページがない小企業については24h.com等の求人サイト、機械関連のサイト等のインターネット上での情報収集（Hさん、Iさん、Kさん）、先輩や友達の話聞く（Hさん、Iさん、Kさん）、大学内で行われる大学や青年団・学生自治会が主催する就職フェアや企業説明会、セミナー、機械設備展示会等への参加（Hさん、Iさん、Kさん）等があげられた。これらにより得られた情報をもとに、希望する就職先で必要と理解した能力の習得に向け、本節の1.で述べたようにさまざまな場・方法で英語（全員）、ソフトスキル（Hさん、Jさん）や機械の基礎知識（Hさん）等の勉強に取り組んでいるということになる。大学でいい成績をあげていい仕事を見つけて奨学金を返済したい（Iさん）、就職には大学で良い成績をとることが重要だと考えている（Kさん）との発言もあり、成績が就職に影響を及ぼすともとらえられている。なお、大学の先生からの就職指導は一切ない（Hさん）、就職先を紹介してくれるような先生にはまだ出会ったことがない（Iさん）、先生方からの紹介はほとんどない（おそらく全体の5%程度）（Kさん）と認識されており、大学課程の学生の就職支援活動における大学（の先生方）の位置づけは、VJCにおけるそれと比較して相対的に低いようである。

就職活動の時期については、大学主催の就職フェアは4年次前期（10月頃）から始まる（Kさん）、3月～4月にかけてパナソニック、キャノン、デンソー、サムスンといった「早期採用をする」企業が大学にきて企業紹介を行い、後日試験（IQテスト、論理数学、専門数学、

専門分野)を実施して内定を出す(ただし卒業生 300~400 人のうち 20 人~30 人程度)(K さん)等の話題が出された他、H さんは 4 月~5 月に面接を受けようと考えている、I さんは卒業(6 月)後、卒業証明書の発行を待ち年末頃から本格的に始めるつもりであるといい、学生により就職活動や内定時期にばらつきがあることがうかがえる。

(4) ハノイ工科大学の学生の場合

ハノイ工科大学・HEDSPI 留学生については、高い日本語能力を有する IT 人材の育成という HEDSPI の設置目的のとおり、4 名とも IT 業界にかかわる就職を希望している。留学から帰国後 4 年間はベトナム国営企業で働かなければならないが、その後は日本の企業(日本オフィス)(M さん)、ベトナムの日系企業や米国・シンガポール系企業(N さん)に転職したいという者、国営企業のほうがよいという者(O さん)と希望はさまざまである。O さんによれば、HEDSPI の学生は日系企業への就職希望者が多いという。就職先を選ぶうえで重要な点としては、労働時間や同僚の態度等の働く環境、大企業であること(M さん)、大企業で給料がよい、もしくは給料が安くても自分のアイデアが実現できる、上司がよい等環境がよいこと(N さん)、自分の興味にあう仕事内容かどうか、給料、職場環境等(O さん)、給料が安くても自分の専門に合っていること(P さん)が指摘され、仕事内容、労働条件、職場環境、企業規模等の優先順位はそれぞれ異なっている。具体的な企業名としては、Viettel、EVN、FPT(NTT 等日本の企業とも連携)等が挙げられた他、現在の専門分野と関係することを最も重視する P さんは、科学技術院(国の研究機関)や日本とベトナムの合弁会社の可能性にも言及した。M さんと N さんは給料の目安として、それぞれ(HEDSPI 留学経験者の平均である)1,000 万ドン以上(M さん)、だいたい 1,500 万ドン~2,000 万ドン(N さん)とした。

大卒後すぐの給料の平均は HEDSPI 以外の IT 系学部卒業生で約 500 万ドン、HEDSPI の非留学経験者で約 700~800 万ドン、HEDSPI 留学経験者では約 1,000 万ドン(M さん)、HEDSPI 参加者のほうが就職できる確率が高いと思う(N さん)といった発言にみられるように、HEDSPI に参加し、留学も経験していることが労働市場における高評価につながると認識されており(M さん、N さん)、全体として就職に対する不安感は見られない。就職先に関する情報は、インターネットで調べるか、IT 系企業で働いている、あるいは HEDSPI メーリングリストをつうじて HEDSPI 卒業生、今の研究室等の先輩や友人(全員)、先生方(P さん)等から入手する。インターネット上の情報よりも先輩や友人からの情報を重視している(M さん、N さん、O さん)。就職時期については、N さんは卒業後すぐに就職したいと明言し、O さんは帰国後希望する Viettel の募集がなければ他の企業に応募するとしたが、M さんではできれば大学卒業後、日本の他の大学にまた留学してみたい、P さんは帰国後すぐに採用募集がなければ IT スキルを活かして 1 年くらいはフリーランスで仕事をして待つとの方針である。

なお、就職経路のひとつとして縁故関係への言及があったのは、ハノイ工業大学と異なる

点である。自らも母の縁故により初職への就職及び転職を行った卒業生 L さんによれば、他の学生も縁故関係が多いという。ただし、HEDSPI 留学生においては、両親 (M さん)、祖父 (N さん)、父の知り合い (P さん) といった親族からの情報入手や紹介の可能性が語られたが、必要とはしていない (M さん)、仕事経験のある先輩の紹介を重視 (N さん) 等、親族ネットワークによる紹介への依存意識は見られない。

4. 将来展望

最後に、【将来展望】についてみておきたい。

ハノイ工業大学の職業訓練課程の学生 (いずれも機械加工専攻) については、仕事面では A さんと B さんは、それぞれ CNC に直接かかわる仕事なら定年まで働きたい (A さん)、勉強したことを活かしてずっと仕事したい (B さん) と、専攻である機械関連の仕事へのこだわりを示した。この 2 名は、影響を受けた人物として、高卒後大学入学前に働いた実家近くの工場で CNC の魅力を教えてくれた先輩 (A さん)、VJC の先生方 (B さん) を挙げている。他方、C さんは、将来は工場ではなく仕事がきつくないオフィスワーカーとして働きたいと思っており、仕事が落ち着いたら一段上の学校に進学したいという希望も持っている。生活面では、A さんは住宅購入等大変だが将来もハノイにいたい、いずれ家庭を持ちたいと述べたが、B さんはとりあえず勉強したいので結婚は今のところ考えていないとした。

短大課程の学生については、卒業後すぐに日本行きを希望する G さんや日本にある企業やベトナムの日系企業に就職したいとする F さんのみならず、4 名ともなんらかの枠組み (技能研修制度、共産青年団研修生制度、労働力輸出等) で時期はともかく将来研修生として日本に行ってみたい、日系企業に入社したいと考えている。近所のお兄さんたちが何人も労働力輸出で日本に行き、帰国後日系企業等で働き、それなりに良い生活をしている (G さん)、高校生の時に話を聞いた地元の少し年上の勤勉で一生懸命がんばる友達が、VJC の中級職業訓練課程に通っており、日本に行って帰ってきたばかり (D さん) といった身近な人たちの影響に加え、よくルールが守られている先進国 (F さん)、先進的な技術国 (G さん) で学びたいという思いもあるようだ。また、D さんと E さんは仕事をしながら大学課程に編入学して勉強も続けたいという希望を持ち、(前節 4. でも述べたように) E さんによれば友達の半数が編入学を考えている。この他、D さんと E さんはそれぞれ仕事が探しやすい、自立したいという理由からハノイでの暮らしがよい、もしくは地元には帰りたくないとする。なお、E さんは、同じ会社で勤め続けてもよいが一定の経験を積んで一人前になったら転職も考えているとしたほか、F さんは、仕事内容が好きで安定していれば同じ会社で経験を積みたいが、資金を貯めていずれ独立して電気関係の会社を作りたい (F さんの専攻は工業電子) という展望も述べた。

大学課程の学生については、H さんと I さんは、ひとつの企業に長く勤めたい (H さん)、自らの能力にあっついて人間関係がよい会社が見つければ長く勤めたい (I さん) との希望

だが、Kさんは働いてみないとわからないとしながらも、就職先の状態や職場環境によっては転職、また条件があれば起業も考えているという。日本留学に向け留学コンサルティングセンターで情報収集をしているJさんは、まず2年間の日本語の勉強を経て東京工科大学等を候補として大学で学び、合計5年程度の日本滞在を経て帰国して就職したいと考えている。暮らしの場については、Iさんはハノイに住みたいとし、Kさんは両親が地元ではなく生活に発展性があるとしてハノイでの就職を勧めてくれている。Jさんについては、両親は留学から帰国後は地元で仕事をしてほしいと望んでいるが、ハノイで仕事が見つかればそれも応援してもらえると認識している。

ハノイ工科大学・HEDSPI留学生については、Nさんは同じ研究室に所属していたHEDSPI卒業生の先輩が優秀かつコミュニケーション能力が高く、起業しており、まだ決まっていないが、Nさん自身も起業のアイデアも持っているとの展望を示した。他方、Oさんは起業のアイデアはあるものの、競争力は低く、起業よりは大企業で働くことを選ぶ。希望する国営企業であるViettelに就職できればずっと勤め続けたいが、もし嫌になって、チャンスがあれば米国系企業に挑戦したいという希望を述べた。

第4節 まとめ

本章では、ベトナムにおける理工系学生の聞き取り調査をもとに、彼らの出身背景と進路選択（第2節）、大学生活と職業観（第3節）について検討した。おもな知見を要約しておこう。

- ① 【出身地域】：協力者全員がベトナム北部あるいは北中部出身であり、ハノイ市内への進学にとまなうベトナム南北間での地域移動は見られなかった。また、よりよい教育環境を求めて、高校進学時に、地方都市からハノイ市内の有名高校へと進学する例も見られたが、そうした層はそれほど多くはなく、その一因として都市部での生活にかかわる経済的負担があることを示した。
- ② 【出身家庭】：全体的に見て、両親のうちどちらかが農林業従事者である者の割合は高い。ただし、大学間で比較した場合、親の職業には違いが見られ、理工系トップランクに位置するハノイ工科大学の学生の場合、親職が農林業等である者の割合は低くなっている。同様に、家族の学歴を見ても、進学課程別・大学別に差が見られた。すなわち、大学進学者の場合ほど、両親やきょうだい大学進学（希望）者である割合が高く、また大学別に見ると、ハノイ工業大学進学者のきょうだい（特に女性）で（受験失敗やきょうだいのために）大学進学を断念した者が多く見られた。
- ③ 【出身高校】：進学先の大学・課程によって、出身高校の学カランクは異なり、大学進学者、特にハノイ工科大学進学者ほど、地元のトップ校や専科高校出身者が多く含まれる。ただし、地域（地方か都市か）によって、高校の教育環境等には大きな差が見られる。
- ④ 【高校での進路指導】：高校在学時に、学校の先生から具体的な進路指導はあまりなされ

ておらず、また重要視されていない。そのかわりに、両親の希望、親戚や友人の意見、インターネットや大学案内本からの情報が進路選択において参考にされている。

- ⑤ 【大学・専攻分野の選択理由】：大学進学に関しては、本人の成績（大学入試の得点等）や大学の知名度等をもとに受験・進学先の大学が選ばれている。専攻分野の選択に関しては、おもに得意科目が活かせるか、興味のある分野の勉強ができるかが選択の基準となっているが、将来の就職可能性やベトナム国内での産業状況等も考慮されている。ただし、全員が希望した進学先に入学した訳ではなく、ハノイ工業大学の場合、大学課程進学者の多くが大学受験に失敗したか受験校を下方修正しており、短大課程進学者の多くが大学受験に失敗していた。また、職業訓練課程への進学には、入学前の就業経験や友人等の紹介・影響が見られた。
- ⑥ 【大学生生活】：下宿住まいが多く、学費や生活費のベースは親や家族からの仕送りの者がほとんどである。日々の暮らしについては、午前は6時半～7時に始業、午後は12時半～13時に始業で、在籍課程や年次によって半日授業、午前・午後授業、さらに夕方から夜にかけて工場実習や実験が組み込まれている場合もある。ハノイ工業大学の大学課程の学生、ハノイ工科大学・HEDSPI留学生（ベトナムでの暮らし）については、クラブ活動への参加も活発である。その目的は語学、リーダーシップを含むソフトスキル習得等とされ、クラブ活動も大学における勉強の場として機能しているようである。授業やクラブ活動以外の時間帯は、勉強、遊び、家業手伝い・アルバイト、学生協会、共産青年団等に費やされている。なお、HEDSPI留学生ではアルバイト経験者はいなかった。
- ⑦ 【インターンシップ】：ハノイ工業大学の総合的な就職支援システムの中でインターンシップは重要な位置を占め、必修である。協力者全員まだ参加していないが、VJCの中級職業訓練課程では行き先はセンターが用意したなかから選ぶ、短期大学課程では自分で探し、見つからなければ大学が紹介するものと理解されている。大学課程では就職したい企業でのインターンシップを希望する者もいる。ハノイ工科大学・HEDSPIでも4週間のインターンシップが必修となっているが、その実態は聞き取れていない。（HEDSPIではない）ハノイ工科大学卒業生は、短大で1回、大学編入後3年次～5年次に各1回（5週間～8週間）それぞれ先生の紹介でインターンシップに参加したと語り、体系的なインターンシッププログラムの存在がうかがえる。
- ⑧ 【就職や仕事選択に関する考え方】：日系企業を中心とする外資系企業への就職を希望する者が多い（協力者の在籍課程やプログラム等の特性の影響を考慮する必要がある）。その理由としては、工場の清潔さ及び同僚・上司との関係等を含めた職場環境がほとんどの者から挙げられた他、OJT・Off-JT両面での教育訓練による技能形成可能性についてはハノイ工業大学のVJCで、賃金等の労働条件については相対的に大学課程で、企業規模についてはハノイ工科大学・HEDSPI留学生での言及が多くみられた。なお、仕事内容については、ほとんどが大学での専攻を活用できることを重視していた。

⑨ 【企業に関する情報源】：大学における（さまざまな主催による）就職フェア・企業説明会・交流会等、企業見学、各企業のホームページや求人サイト、先輩や友人が主に挙げられた。ハノイ工業大学の VJC においては、先生も重要な情報源と認識されている。また、ハノイ工科大学・HEDSPI 留学生では HEDSPI メーリングリストをつうじた卒業生へのコンタクトへの言及もみられた。

⑩ 【就職に向けた取組み・就職経路】：ハノイ工業大学の VJC（とりわけ中級職業訓練課程）では、大学（の先生方）の就職支援や斡旋に対する信頼感が高く、就職先は先生が紹介してくれる、あるいは大学の勉強をがんばり、用意された就職支援システムにのっていればよいという認識が持たれている。労働力輸出の枠組みで日本行きを希望する学生は、LETCO がその橋渡し役を担うことを理解している。

大学課程の者にとっては就職支援活動における大学（の先生）の位置づけは相対的に低く、先生は就職先を紹介してくれる存在とはみられていない。良い成績をとり、収集した情報に基づく企業が求める能力習得に向けた努力を重ね、大学における就職フェアや企業説明会等（オンキャンパスリクルート）への参加に加え、学生独自に企業で面接を受ける等の就職活動を行う。その時期にはばらつきがある。

ハノイ工科大学・HEDSPI 留学生は帰国後 4 年間ベトナム国営企業で働かなければならないが、ハノイ工業大学の大学課程の者たちと同様、独自に希望する企業の募集を見つけて応募するようである。ハノイ工科大学の学生や卒業生からはハノイ工業大学では一切言及がみられなかった家族や親族ネットワークによる紹介の存在が語られ、（HEDSPI ではない）卒業生によれば縁故関係による就職が多いという。ただし HEDSPI 留学生においては、親族からの情報入手や紹介の可能性が指摘されながらも、その学歴が労働市場で高く評価されていることもあってか、家族・親族ネットワークに頼る者はいなかった。

⑪ 【将来展望】：在籍課程にかかわらず、よい企業に巡り合えば長く勤めたいという者もいれば、転職や起業を考える者もいる。大学課程以外の在籍者については、働きながら一段上の課程に編入学して勉強を続けたいという希望を持つ者が多い。また、ハノイ工業大学・VJC の短大課程在籍者 4 名は、いずれも時期はともかくなんらかの枠組みで研修生として日本に行きたいと考えていた。

参考文献

藤田英典、1980、「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択—高学歴時代の自立の条件—』有斐閣、pp.105-129。

中西宏太編著、2010、『ベトナム産業分析』時事通信社。

日本貿易振興機構 ハノイ事務所、2012、「ベトナムにおける教育産業制度調査」

http://www.jetro.go.jp/jfile/report/07001372/education_vietnam.pdf

労働政策研究・研修機構、2012、「ベトナムにおける調査結果」『アジア諸国における高度外国人材の就職意識と活用実態に関する調査報告書』JILPT 資料シリーズ No.80、pp.81-110。